～山田賞～

遠西　大輔

略　歴

昭和51年４月２日生
平成14年３月　岡山大学医学部卒業
平成23年３月　岡山大学大学院医歯薬学総合研究科修了
平成14年４月　岡山大学医学部附属病院血液・腫瘍内科
　　医員（研修医）
平成14年６月　呉共済病院内科　研修医
平成16年６月　岡山医療センター血液内科　レジデント
平成17年４月　癌研究会附属病院化学療法科　レジデント
平成19年６月　岡山大学医学部・歯学部附属病院血液・腫瘍内科　医員
平成22年４月　British Colombia Cancer Agency, Center for Lymphoid Cancer
　　現在に至る

研究論文内容要旨

HCV感染はリンパ増殖性疾患、特にB細胞性リンパ腫の発症に関与していることが知られており、HCV感染リンパ腫患者の治療決定や治療管理に関しては不明な部分が多い。さらに近年RituximabがB細胞性リンパ腫の標準治療となってから、特にHBV感染者においてHBV再活性化に伴う劇症肝炎の増加が大きな問題となっている。一方Rituximab治療中の悪性リンパ腫においてHCV感染が肝障害に与える影響は未だ不明であり、Rituximab治療中のHCV感染者の臨床情報の解明が必要となっている。今回、全国多施設共同後方視的研究にてRituximab治療中の肝障害と予後を調査した。対象はRCHOP療法を受けたDLBCL 553例でHCV陽性131例、HCV陰性422例。肝障害（Garde３－４）と生存割合に関して両者を比較した。３年全生存割合、無病生存割合はHCV陽性例、陰性例でそれぞれ、75% vs 84%, 69% vs 77%であり、いずれも有意差はなかった。肝障害出現率はHCV陽性例、陰性例でそれぞれ27%, ３%（P<0.001）で、多変量解析においてHCV感染が有意な肝障害危険因子であった（HR: 14.72; 95% CI, 6.37-34.03）。これらの結果からHCV感染症例はRCHOP療法施行下において注意深い肝機能モニタリングが必要であることが示唆された。